

## 企画展「出雲国を彩るかざり」

(主催：松江歴史館)

(企画展会期：令和2年12月4日〔金〕～

## 紙上ギャラリートーク

令和3年2月7日〔日〕

### はじめに

新型コロナウイルス感染症対策のため、本展では展示会場でお話する機会を設けず、紙上ギャラリートークと題して、本展の出品作品をいくつかピックアップしてご紹介します。

### 本殿内絵画

出雲地方が神々の地と呼ばれる所以として、神在月(旧暦10月)に全国の神々が出雲に集まることや、『古事記』『日本書紀』などに出雲を舞台とした神話がみられることが挙げられます。松江には意宇六社である熊野大社、神魂神社、真名井神社、八重垣神社、六所神社、揖夜神社をはじめとした有力な社寺が存在し、伝統的の神事や祭礼が残り、今も多くの人々が崇敬の念を抱いています。意宇六社は、出雲国造家と深い関わりを持ち、大社造の本殿で内部に壁画を持つのが特徴とされます。意宇とは『出雲国風土記』の「国引き神話」で郡名由来とされ、出雲国の国府が設けられたこの地域は、古代の政治・経済・文化の中心地でした。本展では、パネルの展示ではありますが、神々が坐す場をかざるものとして、本殿内にどのように絵画が描かれているのかご紹介しています。それぞれの絵画は既に様々な展覧会で紹介されて有名ではありますが、そろって展示する機会は滅多にありません。天井に描かれる雲の違いなども併せてご覧ください。

### 古代のかざり

#### 一子持壺一

古墳時代に用いられた「かざり」のうち、出雲地方でみられる装飾付須恵器の出雲型子持壺は、脚付きの親壺に小さな罎形の子壺をたくさんつけた須恵器で、出雲地方東部を中心に後期古墳や横穴墓からしばしば出土します。親壺に底がないという他地域にはみられない特徴をもつ出雲型子持壺は、松江市大井町の大井窯跡群で生産されたことが知られており、出雲特有の古墳祭

祀道具として利用されたことが分かっています。右図の子持壺は、脚付きの親壺の肩部に小さなほそう 甕形の子壺が6個つき、脚には三角の透かしがついています。親壺も子壺も底が抜けて、出雲型子持壺の様式を備えている壺です。現在最も古い出雲型子持壺といわれています。



出雲型子持壺 こうぶむこうやま 講武向山古墳出土（松江市鹿島町）  
古墳時代後期 6世紀後半  
島根大学法文学部考古学研究室・松江市蔵  
（鹿島歴史民俗資料館保管）

まがたま  
一勾玉一

古墳時代の玉類は古墳の副葬品として出土することが多く、装飾品的な要素だけでなく財力や呪力を体現する威信財としての性格も有していたと考え



られています。なお、古墳時代前期後半以降、松江市玉湯町のかせんざん 花仙山産のめのう 瑪瑙やへきぎよく 碧玉、水晶を用いて花仙山周辺で作られた勾玉類は「出雲ブランド」として当地のみならず全国各地の首長のもとへ流通していました。

玉飾り 石田古墳出土（松江市浜佐陀町、同市まもづ 薦津町）  
古墳時代前期後半 4世紀  
松江市蔵

左図の玉飾りは、古墳から出土した勾玉や管玉で、埋葬された人の頭や首を飾ったものと考えられています。

祭礼と神楽のかざり

あおふしがきしんじ  
一青柴垣神事一

美保神社（松江市美保関町）の青柴垣神事は神話「国譲り」を由来とした祭礼です。祭礼は、彩色豊かなかざりと衣装、そして美しいしんせん 神饌で彩られます。本展では青柴垣神事を描いた絵巻「蒼柴籬神事絵巻」などを通して、祭

礼に用いられるかざりをご覧ください。絵巻に描かれる祭器（八雲板、四神銚、日像、月像など）や衣装などが事細かく描かれています。

「私祭詳解」は、絵巻に描ききれない部分の「かざり」を紹介するものとして展示しました。神饌とは神に供える酒食の総称で、青柴垣神事のために作られる神饌は、米を搗いて粉にしたものを石臼で精白した糝粉で鶴、亀など作る酉造を青竹で組んだ覆籠という籠の中にいれます。覆籠は、白と緑の化粧紙、梅枝で美しく彩られています。本展では、「私祭詳解」は覆籠の頁を開いてご紹介しています。これら神饌も青柴垣神事を彩る美しい飾りの一つとして是非ご覧ください。

(参考：南里空海『神饌』世界文化社、平成 23 年)



「美保神社 私祭詳解原稿」  
抜粋 野村憲治記、個人蔵

## 一 亀尾神能一

出雲神楽のうちのひとつとして、持田神社（松江市西持田町）で古くから行われる伝統神事である亀尾神能に用いる神能面と装束をご紹介します。亀尾神能は、佐陀神能が源流といわれ、少なくとも江戸時代中期には既に行われていました。展示中の神能面は、全部で 14 面です。そのうち、「東蝦夷」「大蛇」以外の面には、文政 7（1824）年の墨書があり、この頃から既に亀尾神能が行われていたことを示す貴重な面です。左図の大蛇面は、昭和時代まで使用された、亀尾神能の演目「八重垣」に登場する八岐大蛇の面です。左図の右側は、現在用いられている大蛇の面です。佐陀神能と亀尾神能の大蛇は「立ち大蛇」といい、角が生えた面と三角文をつなぎ合わせた鱗文の装束を着用し、手に櫛を持つ様式が特徴です。また、右図の大蛇面の額には金色の目が 14 個、両目を併せると合計 16 個の目となり、八つの頭を持つ八岐大蛇をあわらします。



左 大蛇面 文政 7（1824）年  
右 大蛇面  
ともに亀尾神能保存会蔵

亀尾神能の大蛇は「立ち大蛇」といい、角が生えた面と三角文をつなぎ合わせた鱗文の装束を着用し、手に櫛を持つ様式が特徴です。また、右図の大蛇面の額には金色の目が 14 個、両目を併せると合計 16 個の目となり、八つの頭を持つ八岐大蛇をあわらします。

## 武士のかざりー松江藩ゆかりの武具ー

本章では、武士の武器・武具をはじめとした装身具をご紹介します。いずれの作品も近世の匠の技が発揮され、武士たちの美意識が色濃くあらわれています。江戸時代では、精緻な技巧が施され、格式の高い儀礼的な性格が強調されるようになるため、武士の甲冑・太刀拵・鞍は豪華な装飾で家紋を入れ、時には武士の志をあらわした「勝ち虫」などの装飾を施しました。右図は、松江藩の家老 大橋茂右衛門が着用していたと伝わり、蜻蛉をイメージした兜が特徴的な甲冑です。蜻蛉は「勝ち虫」と呼ばれ、前にしか進まない、後ろに下がらない虫として、武士のあるべき姿として甲冑や武具などにそのモチーフが使われました。この他に「勝ち虫」として好まれた虫の中に、ムカデなどがあります。

くろこざねこんいとおどしとんぼがたまだてかぶとぐそく  
黒小札紺糸緞蜻蛉型前立 兜 具足  
江戸時代  
松江歴史館蔵



## 生活の中のかざりー婚礼・節句ー



つつがき みつぞろい  
筒描風呂敷三揃  
大正時代初期頃  
松江歴史館蔵

人々の生活に用いられるかざりは、様々な場所で多種多様なかたちであらわれます。今では少なくなりましたが、出雲地方の節句では「天神さん」、「武者幟」、「かざり馬」などを飾り、子どもの成長と健康を願いました。また、結婚が決まると、嫁入り、もしくは婿入り道具として藍染の風呂敷などを作り、嫁ぐ際に持たせた風習が出雲地方にありました。それら風呂敷などに、筒描といった染色技法で家紋や吉祥文をあらわし、婚礼を彩りました。

最後に、平田一式飾りの自転車部品のみで製作した「海老」を展示しています。平田一式飾りは、毎年7月21日の平田天満宮祭(出雲市平田町)に同種、同類の陶磁器、漆器や自転車部品などの材料で町内各所に設けられた飾り宿に飾るものです。毎年、周知の話題をテーマにした一式飾りが作られ、見る人を楽しませています。じっくりご覧いただきながら、製作された人々の工夫と技術をご覧ください。(文責：松江歴史館学芸員 大多和)